

# 何が見える 空洞の彫刻

将来の大阪の文化を担う若手芸術家に市が贈る「咲くやこの花賞」。昨年度、同賞に輝いた現代美術家、大西康明の受賞記念展が、同市北区のアートコートギヤラリーで開かれている。インスタレーションや彫刻など19点。

高さ約8メートルの天井からつられた大きなオブジェ。ブックと増える泡さなが

## 地元・大阪で記念展

ら、黒い針金が絡まり合い、大小の房状を成して浮かんでいる。目を凝らすと、針金が細かい網の目につながっている。それは空調のわずかな空気の流れに反応し、ゆっくりと動き続ける。展示会場名にもなった新作「空洞の彫刻」。網の目は黒い接着剤が垂れて糸状に固まったものだ。中央の白熱電球が光り、シャンデリ

アのよう。オブジェは四方の白い壁や天井にレース模様の影を映し出す。その時、自分が立っている展示空間もまた「空洞の彫刻」であることに気付く。刻々と表情を変える光と影に包まれて心地いい。

なぜ空洞なのか。「視線がモノをすり抜けることで、目の前のモノを通してその奥も見えているような感覚が得られる」と大西。「何も見えないけれど、何かがあるような空間を見る側に意識させる。想像力の容器としての場を作品として提示したい」と語る。

1979年大阪市生まれ。2001年筑波大芸術専門学群卒業後、京都市立芸術大学大学院彫刻専攻を修了した。07年には岡本太郎「太郎賞」を受賞。東京やアメリカなど国内外で個展を開き、活躍の場を広げてきた。地元での開催は7年ぶりで、「咲くやこの花賞のおかげ」と喜ぶ。

## 「咲くやこの花賞」大西康明



●昨年度、咲くやこの花賞を受賞した大西康明の新作「空洞の彫刻」  
①「ガワ(環)2」(2002年)



「ナツ状の「ガワ(環)2」。カットした木の幹で輪を作り、その表面を鉄片で覆ったものを燃やして内部を焼失させた。直径1・2メートルの強固な鉄の抜け殻は、かつてあった物質の存在を主張しているようだ。

重い素材を使った初期作に対し、軽さが印象的なのが「垂直の量」(09/13年再制作)。高さ4・8メートルの円筒形のポリ袋12個の底にはタイマー式の小型ファンがあり、垂直方向に膨らんだりしぼんだりする。巨大な半透明の袋はただ上昇・下降を繰り返す。見えない空気や重力を軽やかに可視化する試みといえる。

83年度に始まった咲くやこの花賞の受賞者は「美術」「音楽」など5部門で計150組以上に上る。受賞した美術家を個展形式で紹介するのは今回が初めて。市の文化予算削減で、12年度から賞金がなくなっており、こうした機会が「若手の育成」をうたう賞の原点を見つめるきっかけになればと思う。



## 評論の眼

Satoshi Koganezawa

### 大西康明 垂直の隙間 vertical emptiness 展

#### 自然の理



〈vertical emptiness GOoP〉(2014年 800x500x300cm urea, wire, glue) 展示風景

#### 小金沢智

GOoP(2014年)は、天井から吊るしたワイヤーに接着剤(グルー)を垂らし、それに尿素を吹きかけることで作られる尿素結晶を素材にしたものだ。白い結晶は、ワイヤーを装飾するだけではなく床面にも多数連なって空間を浸食し、かつ、尿素が床面の木材の色を吸い込むことによって変色もしていく。全体を視界に入れたとき、結晶をまとったワイヤーはさながら樹氷のようで、眼差しを近づければ、そこかしこで生成されている複雑な結晶の姿を見ることが出来る。また、結晶の生成は窓が複数設置されているギャラリー壁面にも展開し、空間全体がそのための温床のようにも見える。

京都市立芸術大学大学院教養

術研究科で彫刻を専攻した大西の作品は、彫刻に対する強い言及性を備えている。それは大西が、彫刻というジャンルが想起させる重力を伴った「重さ」からは対照的な、「軽さ」を作品で重視していることから見てとれるだろう。すなわち、大西の作品はひとつの固体としてのヴォリュームを備えていない。というよりも、ヴォリュームを持つてしまうことを忌避しているようだ。つまり、「vertical emptiness GOoP」の特徴として、多数のワイヤーと付随する結晶が全体を立体的に構成してひとつの形を作りながら、それぞれの要素が個としても存在しているという点が挙げられる。ここでワイヤーはまるで絵画における線描のごとく、ひとつひとつが有機的に絡み合いながらも個々で独立した運動性も孕んでいる。「vertical emptiness」(垂直の隙間)とは、すべてが接着しない隙間があるからこそ生まれる運動のことを言っているのではない。

大西のこういった「軽さ」への思考はしかし、「重さ」と敵対するものではない。これは、はじめて《垂直の隙間》が発表された展覧会「dreescape——うたかたの扉」(京都芸術センター、



左: 〈exchange of surface GOoP#1〉(2014年 1600×1820×30 mm wooden plute, glue, graphite)

2013年)での出品作品がより顕著であり、その際大西が使用したのはワイヤーではなく木だった。木々を天井から逆さまに宙ぶりにし、夥しい分量の接着剤を垂らし、尿素を吹きかけることで、木々から滴り落ちるようにできあがる軌跡は「線」としての連なりを持って床面と繋がっていく。大西の作品は「隙間」を備えた「軽さ」のあるもののだが、それは「重さ」が世界に存在していることを前提として作られている。

粉末で覆い、熱を加えながら表面に凹凸をつけた平面作品(〈exchange of surface GOoP#1〉など)は、白く繊細なインスタレーションとは対照的な黒く不均質な画面によって見るものに強い印象を残す。しかし、それらも「vertical emptiness GOoP」と同様の、現在の大西の制作におけるひとつの態度を明らかにしている。それは、すべてにおいて自身のコントロールがきくわけではない、自然現象を積極的に作品に取り入れているという点である。温湿度の変化によつて結晶が崩れ、熱のコントロールを誤る危険も伴いながら、

しかし大西がそのような方法を採るのは、自然の理(ことわり)を信頼することから生まれる造形の豊かさを心得ているからに違いない。



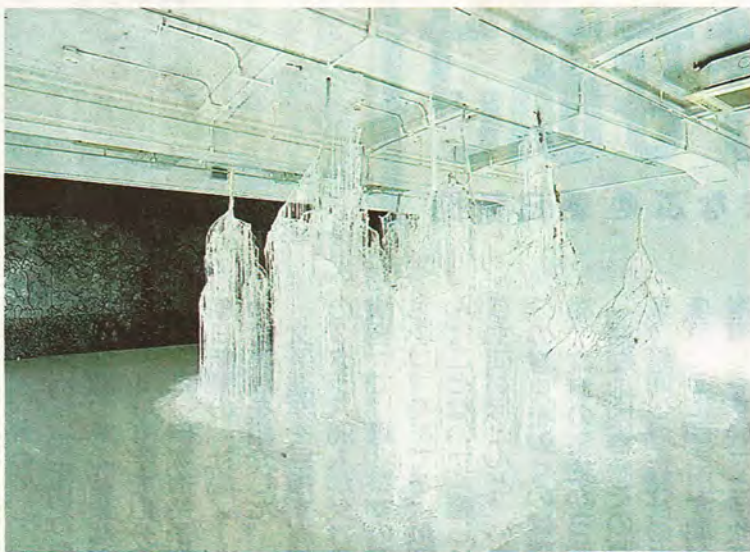
〈vertical emptiness GOoP〉部分

Gallery OUT of PLACE TOKIO  
2月27日-3月23日



## 美術評

## 見えるものと見えざるもの 体感



大西康明「垂直の隙間」Ⅱ 大島拓也氏撮影

## dreamscape—うたかたの扉

一過性の仮設的なものの組み合わせなどで、その場や空間を変容させる空間芸術ともいえるインスタレーション。場や空間が作品化されるため、鑑賞者によって鑑賞するというよりは体験する作品ともいえる。

現在、秀作を体感できる展覧会が、京都芸術センターで開かれている。

作者は大西康明（1979年大阪府生まれ）と松沢有子（75年神奈川県生まれ）のふたり。大西は2004年に京都市立芸大大学院を、松沢は06年にシドニー大学大学院を修了。これまで国内外で精力的に作品展開をしてきた作家たちだ。

この夏は全国的に記録的な猛暑。特に京都は蒸し暑い。しか

し、大西の作品「垂直の隙間」は、その猛暑を忘れさせるような視覚イメージを展開させた。

伐採された幾本もの木の枝がギャラリーの天井から釣り下げられ、それらの枝はまるで「樹水」のように白銀の世界を

思わせる。これらの視覚イメージは、木の枝から地面まで垂れ落ちた接着剤のホットボンドに尿素の飽和水溶液を吹き付けることによって、雪の結晶のような効果が自然と生まれたと聞く。

見方を変えれば天井から釣り下げられた木の枝は、地中に根を張った地下茎にも見える。地上と地中の見える世界と見えざる世界がダブルイメージとして認識された時、接着剤と尿素の生み出す視覚マジックは、マイナス20度の世界を感じさせる。

他方、松沢の作品「つむぐ」

は、京都芸術センターがある室町通の土地の風土や歴史を作品に取り込み、場の記憶を紡ぐ。室町通は、昔から呉服の染め元や問屋が立ち並び、染め物の町だ。

暗闇の中から浮かび上がる葉脈を染め上げ、葉は風によりゆらゆらと何かをささやくようだ。膨大な数の葉は、暗闇に沈み込んでいて目を凝らさないと見えてはこない。

見えている葉の群れは、円形にほのかな照明が当たっている3力所だけ。ここに歴史に埋もれた、見える京都と見えざる京都の奥深さを見る思いがする。大西の光と松沢の闇のインスタレーションの共通項は、見えるものと見えざるものの世界を表現し、五感に響き合う秀逸な作品となっている。

（美術評論家・加藤義夫）



# 2010年代の 自覚

「想像しなおし展」から



6 大西康明さん

人によっては、雪景色や森を見いだすかもしれない。人の想像力は計り知れないほど奥深い。それぞれの風景を呼び起こしたり、思いを巡らせたりする舞台になれば」

展示空間を愛容させる大きな作品を手がけてきた。人の心を揺さぶるものを、古来より東西の美術家は追求してきた。その1人としての隙間に引きずり込む力を、綿密な作業と時間をかけて作る。だが「作る」という意識はないという。

## 非日常のほうが 美しい

## それが僕のアート

説明を聞いてもなお、輝くような白い世界は、現実感を持たない。日本語で「垂直の隙間」。大西康明さん(35)大阪府の《vertical emptiness》は、見る者を未知

れいやなあと、思ってくれよう。単純に、すごいききかけを作っているだけ。垂直線を生み出すのは重力や時間で、そうした現象と、自分の行為で空間を埋めていく。結晶化も、僕が起こしているんだけど、独特の空間のとなえ方

象と、自分の行為で空間を埋めていく。結晶化も、僕が起こしているんだけど、独特の空間のとなえ方



《vertical emptiness (volume of strings)》

は、彫刻を学んだ大学時代に始まる。粘土で形を作り、石こうで型を取り、樹脂を流し込む塑像の制作過程で、できあがった像よりも「型を取る」ことに関心を持った。丸太の表面に鉄板を張ってくぎで打ち付けた後、なかの丸太を燃やし、残った筒状の「型」を作品とした。

「鉄板をたたいたり、くぎを打ったり溶接したり、自分の行為を積み重ねた部分だけを残そうとした。はじめは、でも、それだけじゃだめだった」

燃焼という化学反応を借りることで、結果をはっきり見通せない面白さが加わった。同時に「見通す」「見通せない」という視野の面白さにも気づいたという。

「中身を取り出すためには、(型に)穴を開けてざる状にしておかないといけない。なかを見ると外も見える。手前を見ているけれど奥も把握している。そうした構造が気になって」

実は「垂直の隙間」で用いたロープも、交差させて「ざる構造」を作っている。「視線をすくい取っているようで、取りこぼしているようでもある。空間を把握する視線。でも本当に見えているのか? 見えているようで見えないともいえる」

自分の作為と、自然の作用。型の内側と外側。可視と不可視。平行する思考は、作品にまとめる過程でみごとに昇華して見えなくなる。そして、人を誘う。時代が変わっても変わらぬ、美術の根源的な力だ。「ここではない違う世界に連れて行ってあげられるもの、でありたい。非日常のほうが美しいと思う。それこそが僕の考える美術。そのほうが、いま住んでいるこの世界のことを見つめられるのではないかと、言葉にするのとやっぱり格好すぎるなあ」

(南陽子) おわり

◇想像しなおし 23日まで、福岡市中央区大濠公園の市美術館＝092(714)6051。同館が選抜した、30代の現代美術家6人が新作を中心に出品している。月曜休館。一般1200円ほか。



# 空間のみ込む「非日常」



夏休み。いつもと違う何かに出会える予感。そんなわくわくする体験をアートで試みる企画展「dreamscape—うたかたの扉」が、京都市中京区の京都芸術センターで開かれている。現代美術家、松澤有子(38)と大西康明(34)が、展示空間全体を異世界に変えるインスタレーション作品を出品している。ひとたび足を踏み

入れば、そこは非日常の世界だ。靴を脱いで暗幕をくぐる。薄暗い会場。LEDのわずかな明かりに照らされた無数の葉が目飛び込んでくる。等間隔に並んだ葉は、大中小の円盤状の形を成し、部屋の三方に浮いている。よく見れば、一枚一枚は葉脈が青や紫に染められた透かし葉だ。ゆらゆらと揺れ、ささやき合っているようだ。白い

壁に、星雲のような円い影がぼんやりと映る。目が暗闇に慣れてきたころ、床にも白い葉が敷き詰められているのに気付く。

松澤の作品「つむぐ」。2007年、シドニー大学大学院芸術学部修士課程を修了し、横浜市に住む。越後妻有アートトリエンナーレ(09年・新潟)や中之条ヒエンナーレ(11年・群馬)などで大規模インスタレーションを発表してきた。使う素材は靴下やまち針、枯れ草など。「身近な物は、見る人それぞれの思い出とつながりやすい。作品を紹介したコミュニケーションがしたい」と語る。



⑤暗がりに浮かぶ光る葉が幻想的な松澤有子の「つむぐ」  
⑥自作「垂直の隙間」について語る大西康明—いずれも京都市中京区の京都芸術センターで、森園道子撮影

## 「dreamscape—うたかたの扉」展

ったという。現地のスタッフがお茶をお盆に載せて持ってくるなど「さりげない心遣いが街の人の中に紡がれていることに心打たれ、作品の構想が湧き上がった」。

使ったゴムの木の葉は5000枚以上。浮かび上がる一枚ずつが、水平に張られた黒いミシン糸で等間隔につながる。壁側のベンチに腰掛け、未知なる宇宙のささやきに耳を傾けるのも心地いい。

大西は大阪府在住。京都市立芸術大学大学院で彫刻を学び、黒い接着剤でビニールシートをつり下げる作品などを手掛けてきた。今回は木の枝15本を天井から釣り糸でぶら下げた「垂直の隙間」を展示。氷と雪のカーテンのようで、傍らに立つだけで涼しげだ。

「氷」は、枝の上から垂らした白い接着剤が、糸状に固まったもの。「雪」は、接着剤の上から吹き付けた尿素の結晶。枝のたわみと接着剤の垂直線が絡み合ったユニークな造形を示す。

「自分で操作できない現象を形にする試み」大西。何も無いように見える空間にも、実際は重力が働いている。天井から伸びた枝は、重力の方向性をより意識させる。物理の法則や、化学反応の制約の下で生まれた「天地逆さまの世界」。それは冷ややかさをまといながら、細胞が増殖する生命現象のようにも見える。

9月16日まで。無料。京都芸術センター(075・213・1000)。

【清水有香】



# 非日常の世界 ずれる時間

子どものころ、夏休みは特別な時間が流れていた。時間の速度や長さがいつもと異なっていた。日常の風景や時間の隙間やずれをもとに新たな世界を提示する展覧会が、旧小学校校舎の京都芸術センターで開催されている。2人の作家が、空間を包み込むインスタレーション作品を展示している。

京都芸術センター ■ インスタレーション作品



作品「垂直の隙間」の前で語る大西康明

## 隙間を視覚化、「生」を再認識

南ギャラリーは、京都市立芸術大出身で、2007年に岡本太郎賞を受賞した大西康明（1979年）の作品。目に見えない現象や気配を造形する作品を国内外で発表してきた大西は今回、氷結した森のような白い立体と、相対する黒い壁面を作り出している。白い森は、枝木がいくつも逆さにつるされて、曲がった枝から無数の糸の筋が床に向かって垂れている。糸に見えるのは、ホットボンド。それに尿素を噴霧器で吹き付け、白く結晶化させた。「木の質感や色を超えて、自然の木の枝の曲線の要素だけを抽出した」と大西。世界を逆転し、木と地面の間にある空間を垂直線で埋めることで、天と地の間、見えなかった隙間を視覚化する。幅10センチの壁面は、黒い接着剤を敷き詰めた表面を鉛筆の粉状のグラフィイトで磨き、熱で削ってドロイ

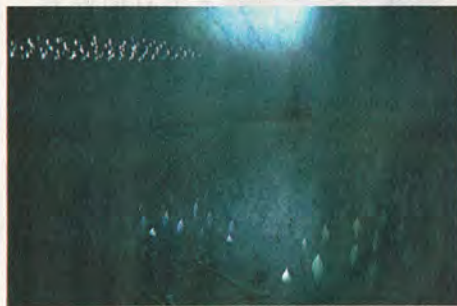
トピックス

## 地と時と人 つながりをつくる

「日常の中で意識しない空間、距離、隙間に手を加えることで、僕らが生きている世界を再認識したい」と語る。

一方、北ギャラリーは、土地の記憶や時間とつながる作品づくりを続ける松澤有子（75年）が、葉脈だけ残って透き通るようなゴムの木の葉を約1000枚、暗い空間に並べた。淡い青や紫に染められた数十枚は、円形に浮かんで見える。複数の糸の上に並べて立たせているため、小人が寄り添ってさわつくように、学校という場の記憶を想起させる。壁には葉の影が揺らぐ。松澤は、呉服問屋の多いこの地域の力が学校を作ったことに感銘し、夏着物の紗や絹のような薄い素材を意識した。住民やスタッフと話を交わす中で、京都ならではの控えめな心遣いを感じたことも生かしたという。「文化は見えなくても、人の中に生きて伝わっていくことを、京都で強く感じた」。作品名は「つむぐ」。地と時と人が紡ぐ象徴的な空間になっている。

（京都芸術センター）京都市中京区室町通蛸薬師下ル9月16日まで 無料



松澤有子「つむぐ」

京都新聞  
2013/8/17

## 展覧会

### ■ 松澤有子と大西康明の2人展



松澤有子の「つむぐ」  
＝写真 大島 拓也

## 「日常の一步先」見つめる

夏休みの学校には少なからずロマンがあった。ふだん目にしている現実の空間が、非日常的な気配をはらんでいるように見えるのだ。実際には虚飾のない現実があるだけなのだが、違ふ世界をのぞいたような気がしていた。

京都市中京区の京都芸術センターは、かつて小学校の校舎であった。その教室を転用した2つのギャラリーで、夏休み企画展「dreamscape」―うたかたの扉―が開かれている。本展は、現在国際的な活躍を見せている2人の作家、松澤有子と大西康明のインスタレーションを紹介するものだ。それぞれの空間を贅沢に使った展示は、「日常の

一步先にあるもう一つの世界」をテーマにしたものだ。松澤有子の「つむぐ」は、暗闇から始まる。わずかに閃く光と影をたよりにしばらく過ぐすと、無数の葉が輪郭を帯び始め、多彩に色づいてくるように見える。目が慣れるまで光源の位置すら分からない。現実には目が開かれるまでの数分は、あてどなく波間を漂う心地であった。

対して、大西康明の「垂直の瞬間」は力業とでも言えようか。たとえば、大きな枯れ枝を水に浸して持ち上げる。そこから滴り落ちる水の流れが一瞬にして凍りついたかのような光景が眼前に広がっている。無論、それも入念につくられたものだが、だからこそ、本作は想像と現実の狭間を見る者に提示する。

「もう一つの世界」とは、たんなる非現実ではない。両作品に共通しているのは、現実の経験を見つめさせ、想像を膨らませる力である。それが、インスタレーションという表現手法の一つの機能と言えるだろう。16日まで。

（西宮市大谷記念美術館 学芸員 池上 司）

日本経済新聞  
2013/9/4



ARTS &amp; CULTURE » VISUAL ART

JANUARY 21, 2015

## Time Made Tangible

Kala Art Institute's *Seeing Time – Time Traveller* includes the work of Japanese artist Yasuaki Onishi, who drapes hot glue over tree branches to make time visible.

By Sarah Burke @sarahlubyburke



Yasuaki Onishi's work aims to make visible that which commonly goes unseen. Specifically, the Osaka-based installation artist is interested in negative space, gravity, and scientific phenomena as forces and elements of spatiality that shape our world without making an appearance. Now, contextualized within Kala Art Institute's (2990 San Pablo Ave., Berkeley) fortieth anniversary group show, *Seeing Time – Time Traveller*, his work gains a dimension that reflects on temporality.

The show, which also features fascinating works by Ranu Mukherjee, Freddy Chandra, and Desirée Holman, presents a group of Kala's fellowship alumni. With explicit allusion to Kala's groundbreaking 1982–1992 program *Seeing Time*, which involved installations and performances throughout the Bay Area exploring the visualization of time, Kala curator Mayumi Hamanaka intends for this show to expand on that theme, investigating the notion of time travel.

Onishi's stunning installation "Vertical Emptiness" stands out because it combines fine detail and large scale. This site-specific installation is one incarnation of a piece that was first created for the Kyoto Art Center. It consists of several tree branches hung upside-down from the ceiling, draped with thousands of strings of hot glue that fall to the floor, and are sprayed with a white, snow-like substance called urea. The room-size result evokes an upside-down frozen wonderland. The long threads of glue create a stringy forest of white tendrils reaching delicately for the earth. In an interview, Onishi explained that his intention was to create an inverted world, in which people are standing upside down in the sky, experiencing gravity backwards.

A collection of painting-like wall-hanging sculptures is displayed behind the installation, forming windows into a contrasting black backdrop. They are created from black hot glue, graphite, and aluminum powder mixed and layered on wooden panels. Onishi calls most of these works "Plate of Phenomena," because they are process-based explorations of the various states that glue embodies as it transforms from a heated liquid to a cold solid. He applies the heated glue onto the canvas, then manipulates it as it dries in order to form organic textures that reflect its transformation over time. Each thread of glue left on a branch in *Vertical Emptiness*, similarly creates a tangible record of its own movement through time and space, as it solidifies on its way to the ground.

Another testament to time embedded in *Vertical Emptiness* is the work's own ephemerality. Onishi spent an entire week in the gallery dripping glue from each of the branches. But, like a sand mandala, Onishi's installation must be destroyed at the end of the show, for lack of a method to preserve it. Its appearance is like a flashlight shining on a thinly woven spider web, illuminating glistening architecture within the void of darkness, as if, for a moment, revealing the invisible infrastructure of the weightless parts of the world.

Through March 21. Free. [Kala.org](http://Kala.org)



# 负空间

## REVERSE OF VOLUME

设计 [日] Yasuaki Onishi

塑料薄膜,黑色胶水,钓鱼线,这些简单的,可以信手拈来的东西被日本艺术家 Yasuaki Onishi 拿来制作自己的装置艺术作品。在他的精心设计下,整个作品呈现出了一种玄妙迷离的质感,远远看去那些装置宛若悬浮于空气中的山云雾雨,柔软、缥缈,让人难以捉摸。

如果人们只是远观这个装置艺术,那么就只会对完成品留下深刻的印象,它们不过是一些形状怪异的盒子,这样只会忽略美好的体验。

事实上那些制成它所用的简单的不能再简单的材料,也是这个设计的重点。当人们走进这个空间,就像是走入了原始的洞穴或者一个不常见的室内空间,它开始从内部散发着神秘的色彩,那些组成它的元素又显得那么脆弱。在这里安静的站立或者静静的步行其中,就会有不一样的发现。

观众会认为时间暂时停下了脚步,在  
magazine : 室内id+c #214 p126 2012/6, China

此享受片刻的宁静,步行、冥想,感受来自异度空间的能量,同时也能够观察到这个设计中的光线、外形和线条的变化。

这个装置艺术作品在2012年4月14日~6月24日在美国莱斯大学艺术画廊展出,它的设计者 Yasuaki Onishi 认为这些雕塑呈现了“负空间 (Reverse of Volume)”的状态,可以让人陷入空白和冥想。

这种场地、材料、情感三者相结合的艺术表现形式,有着自己独特的一面,发人深省。乍一看宛若中国水墨画的场景,让人感受到一种奇异的共鸣与融合,又有无限的遐思。

除此之外, Yasuaki Onishi 还有一系列的同名称雕塑作品。他毕业于筑波大学以及京都市立艺术大学,经常在日本和美国各地举办个人展览。

(编译:夏天)

收稿日期:2012.05.10



- [Art](#)
- [Music](#)
- [Dance](#)
- [Theatre](#)
- [Film](#)
- [Books](#)
- [News](#)
- [Reviews](#)
- [Blogs](#)

### Review: Yasuaki Onishi's Reverse of Volume RG

Posted by [admin](#) on May 4, 2012 · [Leave a Comment](#)



Yasuaki Onishi, *Reverse of Volume RG*, 2012, Commission, Rice University Art Gallery, Houston, Texas. PHOTO: NASH BAKER

***Reverse of Volume RG***  
**Rice Gallery**  
**13 April- 24 June 2012**

Nebulous Mountains hover in space. Yawning caverns glow supernaturally as they sway in the air. Yasuaki Onishi transformed Rice Gallery into a perplexing, organic space with *Reverse of Volume RG*.

The viewer first sees *Reverse of Volume* from the outside through the large Rice Gallery windows: a seeming terrarium for the glowing landscape within. Black spindles of a hairlike substance climb from the form, appearing as tangled vegetation before anchoring into the near invisible suspension above the work. The skeins of black threads create an atmospheric effect, much like rain or mist stuck in time.

Within the gallery space, the form is a clear and dominant force that implores the viewer to walk inside. The viewer enters a glacial cave peppered with black, tadpole-like spots lit from below with diffused light. From the inside, the once hazy structure appears falsely rigid. The craggy, luminous substance vaults from near-knee-height to high above the viewer. However, the structure delicately trembles with minor disturbances in the air. The form interacts just as sensitively with the light pouring in from the windows, revealing touches of green and reflected light from other viewers' clothing.

Onishi shaped this form by creating an irregular ridge of cardboard boxes on scaffolding and laying plastic sheeting over the boxes. He then dripped black hot glue from the support on the ceiling down to the sheeting, anchoring the work. The artist can only drip the glue from an arm's length at a time, requiring regular readjustment of the boxes and scaffolding. This incremental assembly takes a painstaking three weeks. Onishi cleared the boxes away after the glue had set, leaving only a loose mold of the boxes' topography suspended by thousands of tiny filaments.

Onishi arrived at working in this fashion through his study of sculpture and casting. As he worked with the process, the artist found himself more interested in the mold than the cast object. Emphasizing the ephemeral and negative on a grand scale, Onishi departs from traditional cast-making techniques and arrives at a meditation on landscape, architecture, and sculpture.

Sometimes a means to an end is an end in itself.

**-GEOFF SMITH**

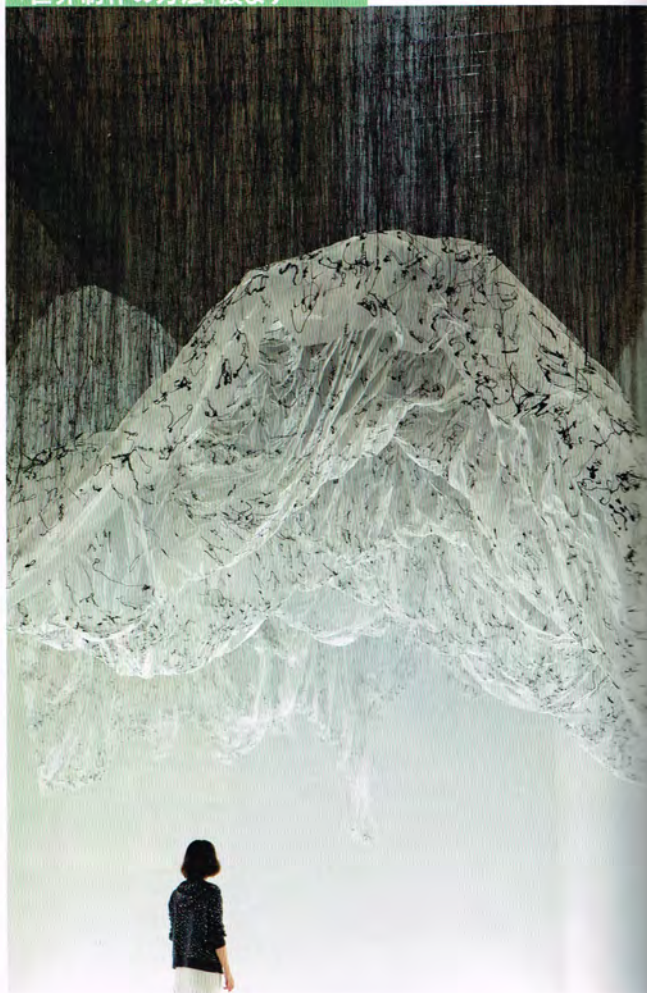
Geoff Smith is a twenty-something arts enthusiast, printmaker, and occasional curator.

[www.ricegallery.org](http://www.ricegallery.org)



## 雨ポンドと影絵列車

「世界制作の方法」展より



「上」で、無数の黒いポンドの雨垂れが、巨大な極薄のポリエチレンシートを宙吊りにしている。チープではかない素材が、鍾乳洞めいた壮麗な空間を生み出す。素材のチープさと効果の落差の点で、クワクポリヨウタ（1971年生れ）もまたユニークだ。「左3点」。Nゲージの線路を走る列車の灯りが壁に投げる影。ビル群や鉄橋、プラントのようなイメージが次々と展開するが、それらはじつは洗濯挟みや電球、鉛筆、ゴミ箱など日用雑貨のシルエットなのだ。価値無き実体が紡ぐ、変幻する影の美しさ。——叙情と寓意が渾然となった両作品、これはもうインスタレーションの名作でしょう。

「10・4 ▼ 12・11 国立国際美術館」

9

人（組）の作家によるインスタレーション展。入口で迎えてくれるのは

大西康明（1979年生れ）の作品



# 大西康明 ― 体積の裏側展

愛知県美術館展示室6（名古屋市中区）

2011年2月15日（火）～4月17日（日）

金井直 ◆ 信州大学准教授

美術作品の大多数を縮減模型とみなしたのはレヴィ・ストロースであったが、まさしく『体積の裏側 (AMO)』も、大きいもの、広いものへの連想や憧憬へと、観る者を繰り返しいざなう作品である。たとえば、曙光に

映える雪山の、稜線が織りなす一瞬の明暗、識閥のポリクロミー。あるいは、太古の宇宙図の、吊り天井のような星界に広がる永劫の明滅。「いざない」が可能なのは、大西の造形がプログラム化された意味を

じみの崇高の美学に周回遅れでたどりつくロマン主義芸術とは異なつて、内容と形式、部分と全体、企図と成果を早々には分たない、手元から考える造形の作法に貫かれているのである。

本作において、さらに重要なのは、作品外観に即した連想の幅が、作品の内部、半透明のシート内で、効果的な逆転を被りつつ、いっそう増幅されるといふ鮮やかな事実である。作品の内側に入りこむや、まず耳に入るのはシートの摩擦音であろう。それは空氣の動きであり、つまりは観る者の動作である。シートのざわめきは、したがって、われわれの皮膚のうえをすべる空氣の感触と徹底的に連動している。皮膚とシートはまさしく表裏一体なのである。そう思うとき、ポリエチレンの皮膜の向こう、接着剤でできた黒い線条のしなりと連なりも、皮下の神経細胞を見るようで、ますますシートの裏側は、皮膚の拡大模型として展開、拡張していく。

なぞる芸術ではないからだろう。もちろんそこに綿密な構想・設計があることは言を俟たないが、それでも、素材への問いかけ、たとえば接着剤の粘性と強度を、ポリエチレンシートの折り重なりとつき合わせていく緊張感のある手の判断が、前プログラムの作品を支えていることは明らかだ。そうした素材と手技の対話・往還には、ふたたびレヴィ・ストロースにあやかるならば、古の画家のレース編み描写にも似た、ポリコラージュの魅力が充ち満ちている。つまり、『体積の裏側』は、仮想現実を積み上げて、結果的に、日常の内に観る者を開き出す出来合のメディア・アートや、音や光の絶対的強度によってポスト・ヒューマン・アートをつうたいする、結果、おな



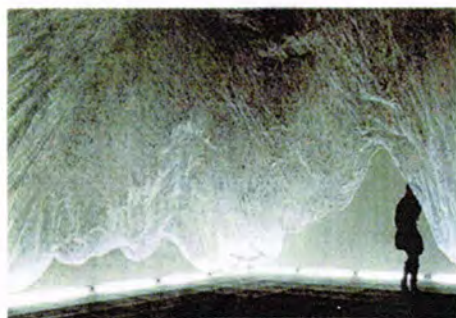
撮影:高嶋清俊

127 REAR no.26 2011

芸術批評誌【リア】REAR no.26 p127-128  
2011/8/20

## 美術

◇大西康明 ― 体積の裏側（4月17日まで、愛知県美術館展示室6）名古屋市中区東桜1。月曜休館。有料



縦八メートル、横十メートルの広い展示室を埋め尽くす、大型の立体作品「体積の裏側」―写真。薄く軽いビニールシートに、数え切れないほどの接着剤を糸のようにたらし、ふわつとつり下げたのである。

中にそつと足を踏み入れると、それだけで作品がかすかに揺らぐ。あま

りの繊細さにたじろぐが、何か大きなものに包まれている心地よさ。とらえどころのない大氣の動きをそのまま写し取ったかのような作品の造形に、「空氣と紙一重の作品を目指した」という大西の言葉が響く。

一九七九年、大阪府生まれ。四年前、愛知県による若手芸術家の支援事業「新進アーティストの発見 in あいち」の美術部門で入選した。

「体積の裏側」は名古屋市内に約三週間滞在して制作。しかし、展示期間が終われば、作品は解体され、生み出された空間も消えていく。

いわば、この場所しか存在し得ないアート。だからだろう、かげろうのようなはかなさを感じ、一方、作品には力強さにもじむ。

（宮）





# Komplicerad installation i all sin enkelhet

FENGERSFORS

**En installation med bara ett enda konstverk som så gott som är anpassad till utställningslokalen och fyller upp den helt och hållet. Kan det vara något?**

Tveklöst ja.

Efter att ha sett Onishi Yasuakis horisontella skog – Horizontal Forest – hängande hos NotQuite i Fengersfors är nog även den rätt stora skaran vernissagebesökare benägna att hålla med. Konstnärens mål är att med så lite material som möjligt skapa en maximal volym. I detta fall fylla i stort sett hela utställningslokalen.

Japanske Yasuaki kom

närmast från Indien där hans verk rönt stort intresse.

Fengersfors är en mellanlandning på väg till Vermont i USA. Ett par år har han utövat sin teknik, och gissningsvis förfinat den. Han upptäckte metoden att utnyttja smältlimets egenskap att bilda tunna trådar i Sydkorea. Ett land som han beskriver som mycket intressant att arbeta i. Likt Japan, men ändå olik.

Installationen har tagit två veckor att fullborda och nu hänger den i sina tusentals smältlimtrådar från trådar i taket.

Botten som Onishi Yasuaki först lagt ut på bord cirka en meter från golvet



Yasuaki har låtit smältlimmet droppa nedåt, och då bildas dessa lustiga krumelurer.

FOTO: CECILIA WALLIN

består av tillklippta plastbitar som med inspiration kanske från den annalkande hösten fått formen av lönnlöv.

Men de är genomskinliga, och konstverket har ingen annan färg än smält-



Här är jag! Nyfikenheten var stor när det gällde att undersöka det märkliga konstverket som fyllde upp nästan hela utställningslokalen.

FOTO: CECILIA WALLIN

limtrådarna som är svarta. Det ger utrymme för betraktarens fantasi.

## En del av installationen

När besökarna rör sig runt installationen blir de själva en del av den, och avteck-

nar sig genom konstverket mot väggarna.

Vid vernissagen fanns många barn på plats, som genast kastade sig in under verkets botten och tyckte det var kul att titta uppåt, eller krypa utan att nudda den till synes så sköra ytan. Konstnären själv verkade minst oroad över att något barn skulle trassla in sig i installationen.

Det skulle vara lätt att göra mer av konstverket. Till exempel genom att färgsätta det på olika sätt med ljus, eller låta en svag vind blåsa på det. Kanske kan det bli något sådant inslag, men det fina är att åskådaren ges fullt utlopp för att fantisera kring hur man skulle kunna se eller uppleva installationen på vilket sätt man vill.

Hur konstnären haft tålamod, och kunnat utöva sin teknik är en gåta. De flesta hade nog nöjt sig med att testa tekniken på någon kvadratmeter. Högst. Yasuakis verk mäter åtskilliga kvadratmeter.

Kanske har vistelsen i



Onishi Yasuaki framför sin horisontella skog som nu hänger hos Not Quite i Fengersfors fram till den 13 november.

FOTO: THOMAS WALLIN

det lugna Dalsland spelat roll:

–Det är ett vilt landskap med ett vackert ljus, tyckte konstnären själv.

Thomas Wallin

0531-52 21 02

thomas@dalslanningen.se



Barnen var mycket ivriga att undersöka och krypa under installationen under vernissagedagen.

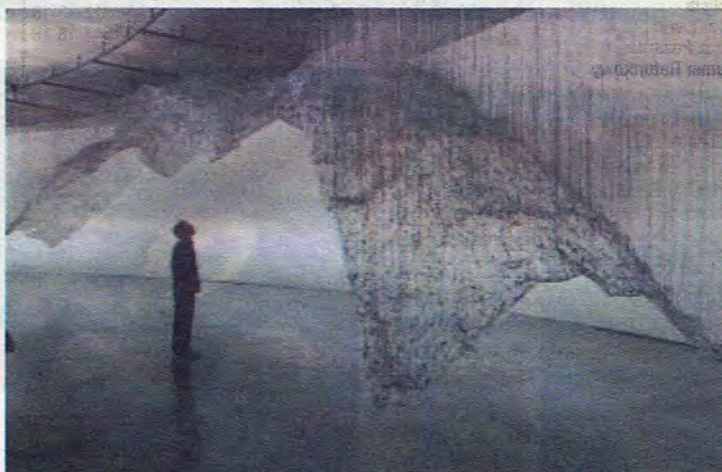
FOTO: CECILIA WALLIN



# Yasuaki Onishi w Galerii Bielskiej BWA

Yasuaki Onishi, uczestnik międzynarodowych rezydencji artystycznych „Beyond the time”, organizowanych przez Galerię Bielską BWA od czerwca do sierpnia, jest autorem efemerycznej instalacji w alternatywnej krakowskiej

kolekcjach sztuki; wyróżniają się mistrzowskim wykorzystaniem pełnej gamy. Od lat 90. używa kamer wielkoformatowych wykonując odbitki w technice stykowej. W Bielsku-Białej i okolicy artysta wykonał fotografie, z których część



galerii Skład Solny. Realizacja pracy była możliwa dzięki współpracy Galerii Bielskiej BWA z Miho Iwatą, artystką performerką z Krakowa. Wystawa potrwa do 17 lipca, a oglądać ją można po uprzednim umówieniu się. W czwartek, 14 lipca, o godz. 17.00, w Galerii Bielskiej BWA Yasuaki Onishi zaprezentuje efemeryczną instalację, którą realizuje w Bielsku podczas pobytu na rezydencji. Artysta zaprezentuje także swoje wcześniejsze prace w postaci prezentacji multimedialnej. Program międzynarodowych rezydencji artystycznych pod hasłem „Beyond the time / Poza czasem” Galeria Bielskiej BWA rozpoczęła 1 czerwca. Są one kontynuacją działań Galerii rozpoczętych w 2009 roku podczas rezydencji artystycznych „Incydenty”, których efektem było wykonanie czterech rzeźb umieszczonych na stałe w przestrzeni miejskiej przez polskich i norweskich artystów. Tegoroczne rezydencje zainaugurował tygodniowym pobyt Bogdan Konopka, znakomity polski fotograf mieszkający w Paryżu. Jego fotografie znajdują się w wielu międzynarodowych

zaprezentowanych będzie podczas najbliższego Foto Art Festiwalu. W rezydencjach bierze udział międzynarodowe grono artystów sztuk wizualnych, od których oczekuje się prac stworzonych z myślą o funkcjonowaniu w precyzyjnie określonym miejscu Bielska-Białej. Rezydencje cieszyły się zainteresowaniem. Chęć udziału zgłosiło 26 artystów z 18 krajów. Galeria wybrała i zaprosiła pięcioro artystów: Yasuakiego Onishi z Japonii, Titę Salinę i Irwana Ahmetta z Indonezji, Esperanzę Cortes z USA oraz Michaela Vincenta Manalo z Filipin. Do końca sierpnia artyści w wybranym przez siebie terminie będą tworzyć swoje prace oraz zaprezentują swoją twórczość podczas warsztatów i spotkań z widzami. Prezentacja powstałych podczas rezydencji projektów planowana jest na 1 września. Rezydencje organizowane są przez Galerię Bielską BWA z inicjatywy Izabeli Ołdak, kuratorki projektu. W czasie jego trwania zaprojektuje ona mural na jedną ze ścian w przestrzeni publicznej Bielska-Białej, jako stypendystka miasta Bielska-Białej w dziedzinie kultury i sztuki.

NET





## **Filigranes Werk aus Klebstoff**

Einen fragilen Vorhang aus schwarzen Tropfen zeigt der japanische Künstler Yasuaki Onishi in seiner ersten Europa-Ausstellung, die in der Grazer Galerie „para\_Site“, Kaiserfeldgasse 22, zu erleben ist. Onishi ist zurzeit Artist in Residence in einem der Rondo-Ateliers und arbeitet vorwiegend mit Klebstoff, den er, wie in dieser Arbeit unter dem Titel „Ridge of Boundary“, in der Bewegung gerinnen lässt. Daraus entsteht eine Skulptur, die sich durch Leichtigkeit und Transparenz auszeichnet, deren komplexe Struktur zur genaueren Betrachtung einlädt. Lichtreflexionen verorten die Arbeit gekonnt in ihrem Umfeld. Und auch der Raum selbst wird durch die von der Decke hängenden Klebstoffperlen definiert. Zu sehen ist die Arbeit noch bis 30. April.

MR





上—untitled 2007 蛍光灯、アルミシート、ファンなど 150×90×90cm  
 右上—untitled 2007 ポリエチレンシート、バールン、ヘリウム、鉄道模型など 538×200×175cm  
 右下—untitled 2007 ポリエチレンシート、扇風機など 250×260×412cm

## 大西康明

「表裏の隙間」

### PANTALOON

6月6日—7月1日

大阪

大西康明は自作についてこう語っている。「空間に手がかりをつけることで、捉えられないものを意識する作品を制作しています」。例えば今年の「第10回岡本太郎現代芸術賞展」で太郎賞を受賞した作品《restriction sight》は、蛍光塗料を塗ったひもや斑点をまとった巨大なポリエチレンシートの袋が、ブラックライトの下で伸縮するもの。深海のクラゲを思わせる動きで楽しませつつ、眼には見えない空気の流れを体感させるものだった。他にも、切り倒した木の枝を金属で覆い、燃やすことで木の形状のみを意識させる作品や、暗闇で金属にグラインダーをかけ、火花を飛び散らせる行為を1枚の写真に収めた作品などがある。日頃気付かないが実は普遍的に存在する何かを意識させ、空間に対する認識を変容させる一種の装置。それが大西作品の本質である。

本展には写真と小品を含めた5作品が出品されたが、メインは以下の3点だった。まず、巨大なポリエチレンシートを風船で吊り、同時に鉄道模型と接続して円形の軌道をゆっくり回り続ける半円筒状の作品。次は、約50センチメートルの高さにポリエチレンシートを貼り、中央に開けた



## 関西エリア

Kansai

小吹隆文 | 選・評



穴から送り込まれた風で風呂敷大のシートが上空に舞い上がる作品。そしてもうひとつは、縦に吊った4本の蛍光灯に銀色の薄い円形シートが通され、小型ファンの風を受けてゆらゆら回転する作品である。

いずれもチープな外観で仕組みが丸見えだが、それゆえ構造に気を取られず作品の本質を凝視できる。半透明や銀色のシートが移ろうことで

空間に生じる繊細な変化、反復運動の中にも同じ動きは二度とないという単純な事実、そうした現象の積み重ねを眺めるうち、こちらの空間センサーが徐々に研ぎ澄まされていくのである。無防備な外見とは裏腹に高次の美意識を紡ぎ出すことに成功した今回の新作。大西自身も手応えを感じており、今後の展開に影響を与えることになるだろう。



Das Japan Media Arts Festival ist mit einer sehenswerten Präsentation zeitgenössischer Arbeiten zu Gast im Dortmunder U

# Mangas, Monster, Meditieren

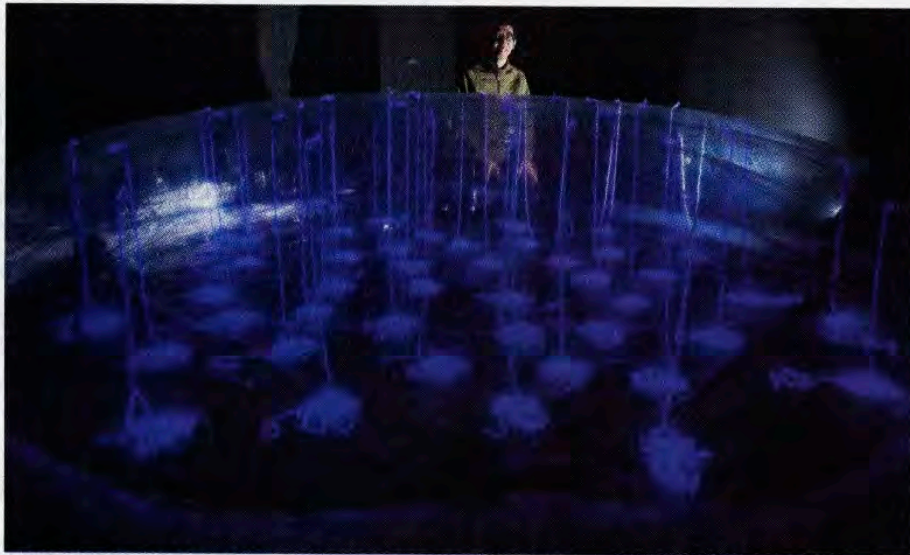
Rolf Pfeiffer

**Dortmund.** Seit 15 Jahren schickt ein „Amt für kulturelle Angelegenheiten“ das „Japan Media Arts Festival“ auf Reisen durch die Welt. Es soll japanische Medienkunst bekannter machen, und der „Hardware Medienkunstverein“ hat dieses Festival 2011 nach Dortmund, unters U geholt. In den Vorjahren waren Peking, Wien oder Istanbul die Stationen, da reiht man sich gerne ein.

Kunst, Medienkunst, Populärkultur, E und U – an Etiketten besteht kein Mangel, und trennscharfe Zuordnungen sind meistens gar nicht möglich. Allerdings gibt es im zeitgenössischen japanischen Kunstschaffen wichtige Bezugspunkte wie die Mangas, Comics mit großäugigen jungen Heldinnen und Helden, denen auf besondere Art Kindlichkeit und Erotik zugleich eigen sind. Aus diesen Zeichengeschichten entwickelten sich Film-Typologien, Videospiele, fotografische wie skulpturale Arbeiten und anderes mehr. „Manga ist der Nukleus, aus dem alles kommt“ sagt

**ONLINE** Mehr Fotos finden Sie online unter

[DerWesten.de/kultur](http://DerWesten.de/kultur)



Geheimnisvoll erstrahlen Fäden im Schwarzlicht – „Restriction Sight“ von Onishi Yasuaki. Foto: Knut Vahlensieck

Stefan Riekes, der die muntere Ausstellung für das U kuratierte. Die Traditionslinie könnte man noch weiter in die Vergangenheit ziehen, etwa zu Katsushika Hokusais weltberühmtem Tsunami-Farbholzschnitt „Die große Welle von Kanagawa“, der um 1830 entstand und dessen cartoonhafte Anmutung die „japanische Ästhetik“, wenn man verkürzt so sagen darf, noch immer stark zu prägen scheint.

Was also gibt es zu sehen,

neben Mangas (in Originalzeichnungen), herkulischen oder ekeligen Phantasiefiguren, Monstern und Aliens? Viele eindrucksvolle Arbeiten, und das erstaunt in dieser oft atemlosen, lauten japanischen Medienkunstwelt ein wenig, finden sich in stillen, meditativen Extraräumen. So die kleine Eisenbahn von Kuwakubo Ryota, auf der ein Scheinwerfer montiert ist, welcher durch Kulissen am Streckenrand strahlt und atemberaubende

Projektionen auf der Wand erzeugt („The Tenth Sement“); oder das wandgroße, knallbunte Pixelbild „Days and Nights“ von Hirakawa Norimichi und Que Houxo, das sich permanent verändert.

Im Schwarzlicht erstrahlen Bindfäden, die in einem durchsichtigen Ballon hängen, welcher unmerklich sein Volumen verändert („Restriction Sight“ von Onishi Yasuaki), fünf Computer produzieren „voneinander lernend“ Bilder

## INFO

### Die Dreiwochenschau

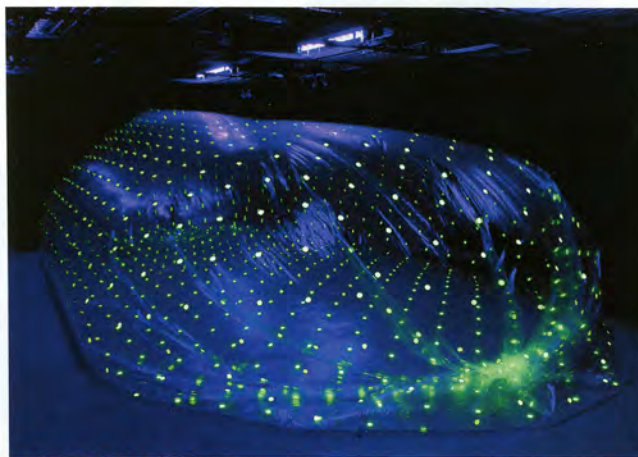
■ „Japan Media Arts Festival“ im Dortmunder U, Leonie-Reygiers-Terrasse. 10. September bis 2. Oktober 2011

■ Geöffnet Di+Mi 10-18 Uhr, Do+Fr 10-20 Uhr, Sa+So 11-18 Uhr, Eintritt 5 Euro

und Töne von Phantasiewelten („rheo. 5 horizons“ von Kurokawa Ryoichi), und so gibt es der bemerkenswerten Arbeiten etliche mehr, und die einen mag man japanisch finden und die anderen nicht, letztlich sind solche Sortierungsversuche sinnlos.

Insgesamt werden 55 Projekte auf der Sonderausstellungsfläche im 7. Stock des U präsentiert. Außerdem gibt es ab Samstag ein Filmprogramm im U-Kino (Erdgeschoss) und am Freitagabend ein Konzert der virtuellen Sängerin Hatsune Miku (soll auf Youtube der Renner sein) mit der Gruppe Momoiro Clover Z, die aus fünf echten Mädchen besteht – im „View“ unterm U-Dach, Eintritt frei. „Maximalen Spaßfaktor“ und „Pop größer als Gozilla“ kündigt der Veranstalter bescheiden an.





## 大西康明 ビニールの深呼吸

[上]大西康明《restriction sight 3》2005年  
ポリエチレンシート・紙・蛍光塗料・  
FAN・ブラックライト

**暗**闇で何かがゆっくりうごめ  
いている。それは、長さ9  
メートルの巨体を時おりたふんと  
揺らしながら徐々にふくらみ、天  
井まで膨張すると今度はゆるゆる  
萎みはじめて、やがて床にべちゃ

りと伏せてしまう。この動きが10  
分サイクルで反復される。大西康  
明（1979年生れ）のオブジェは、  
聞けば単純な仕組みで、蛍光塗料  
で水玉模様を描いた特大ビニール  
袋にファンで空気を出し入れして  
いるだけだ。が、そのアナログな  
仕掛けは袋の外観を拡大縮小させ  
るにとどまらず、底面をさまざま  
に波打たせ、等間隔の水玉にも有  
機的なうねりを生じさせる。未知  
の生き物の、長周期の深呼吸を目  
のあたりにしたかのようなだった。  
「2005・12・1▼24 IN A X  
ギャラリー」

芸術新潮 2006年2月号 p127 ギャラリー レビュー



大西康明 闇を視る 2004  
蓄光シート、ライトほか

GALLERIES

大西康明  
GALLERY b. TOKYO  
3月15日〜20日

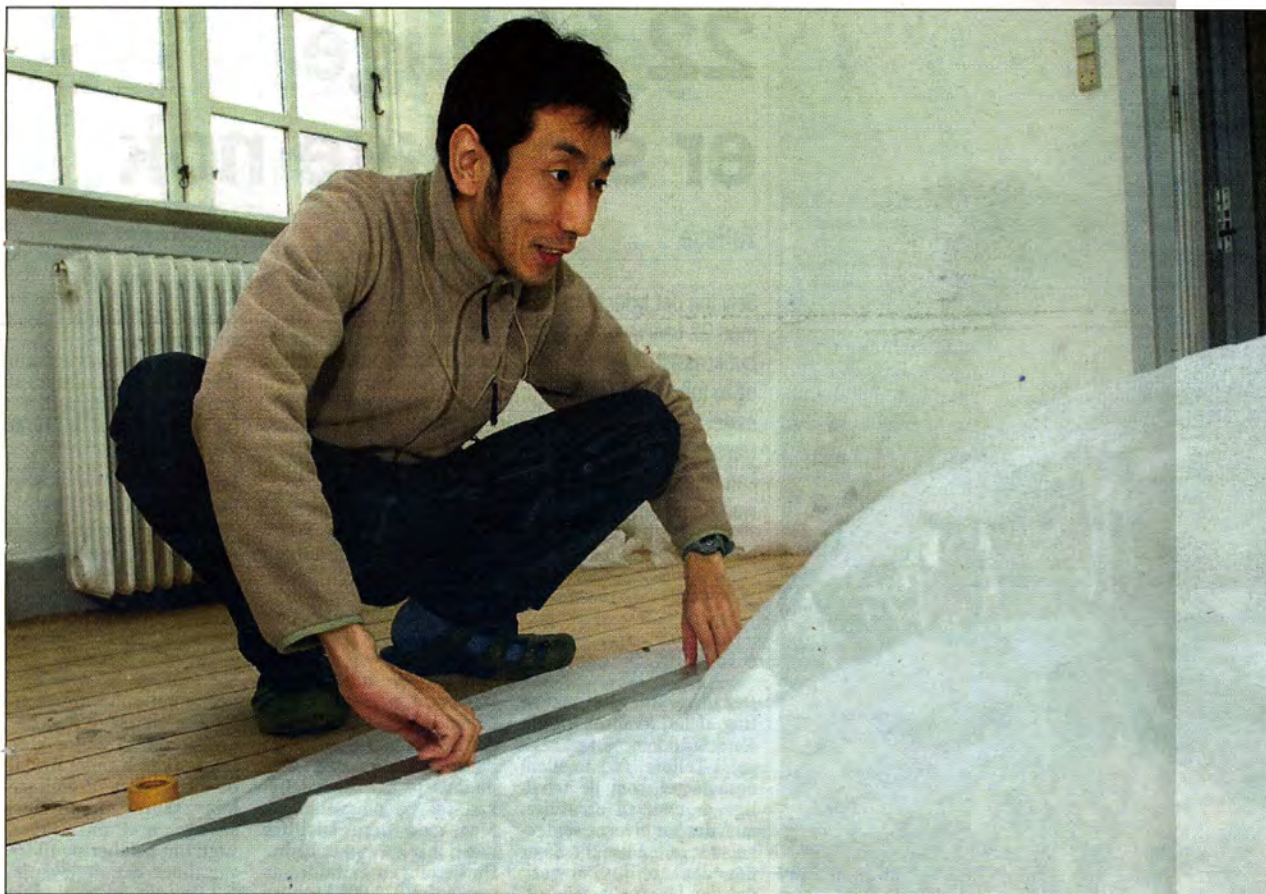
東京

展示室のなかにはほぼ完全に暗転し  
ている。暗闇に、いささかの恐怖感  
を覚えつつしばらくすると、突然ラ  
イトが一瞬だけ点灯し、中央に積ま  
れた物体がはいま見える。再び暗転  
した中空を、じっと眼を凝らして見  
ると、うっすらと発光するドットが、  
そこに積み重なっていた物体の形態がわ  
かる程度にちりばめられているよう  
だ。その様は、あたかも夜のネクロ  
ポリスにおける、微かな残光を、上  
空から俯瞰しているかのようにも見  
える。しかし、その死都のさまに、  
若干のノスタルジーを感じているの  
もつかの間、再び瞬くライトによつ  
て、そのような感覚は否定され、振  
り出しに戻される。一瞬の閃光の間  
に、そこに積まれた謎を探り当てよ  
うとすると、次第にそれがなんであ  
るのかが判明してくる。都市を形づ  
くる、積載された物体は、あまりに  
も日常的な消費財に過ぎない、と。  
大西康明の今回の作品は、次のよ

うな通俗的な消費財からなる。イン  
スタント食品、スナック菓子、洗濯  
用洗剤等々といった、パッケージ化  
された消費財がギャラリー中央に積  
み上げられ、それらすべてのパッケ  
ージには、個々の形態をトレースす  
るよう、ドット状の蓄光シートが貼  
られ、展示室が完全に暗転した後  
も、しばらくの間シールの部分だけ  
がわずかに発光するのである。  
あからさまに通俗的なそれら商品  
は、暗転することによって社会的・  
実用的属性を剥奪され、蓄光シート  
が放つ微光によって、純粹で抽象的  
な形態として立ち現れる。しかしな  
がら、展示室上部に据えられたライ  
トが間隔をあけて一瞬だけ発光する  
ことによつて、そのような純粹性が  
身も蓋もない通俗性によつて形づく  
られていることを示すのである。こ  
の純粹性と通俗性との往還に、この  
作品の核が存在する。この作品から  
われわれが自らの内に発見するもの  
は、抽象的な美的通俗性による反省  
というよりも、抽象性と通俗性の往  
還自体に、センチメントを喚起取つ  
てしまう自らの病である。

美術手帖 2004年5月号 p195 ギャラリー レビュー 選・評 土屋誠一





Yasuaki Onishi arbejder intenst for at få en installation færdig til den 3. april på Sølyst. Det bliver noget med en skulptur i stof, der holdes oppe af en luftstrøm. Foto: Mik

# Et omrids af virkeligheden

Jyderup

Den japanske kunstner Yasuaki Onishi er kommet til Sølyst, hvor han skal være i to måneder. Den 3. april åbner han en udstilling med en installation, der skal udfordre betragterens fantasi. Lidt ligesom når japaneren selv er på indkøb i Jyderup.

Japan. Blev færdiguddannet som skulptør i 2004 fra universiteterne i Tsukuba og Kyoto. I fem år underviste han på deltid på et gymnasium, men for et år siden erklærede han sig som fuldtids kunstner.

- Jeg har kun en lille indtægt. Fremtiden er usikker, for installationer er svære at sælge, siger Yasuaki Onishi.

- Min lærer på universitetet i Kyoto sagde, at foto og skulptur. Så nu arbej-

der jeg både med foto og skulpturer, siger han.

**Udstillingen svæver endnu lidt**

Den 3. april er der fernisering på det arbejde, Yasuaki Onishi har udført på Sølyst.

- Det bliver en skulptur i stof, der holdes oppe af en luftstrøm. Måske også akvareller og tegninger med pastel, men det er jeg ikke sikker på endnu, siger kunstneren.

Han har eksperimentet med fotografiet, hvor han blandt andet har fået laserlys i mønstre i mørke rum. Og kemisk behandlet uld, der lyser i mørket og gengiver omridset af et rums genstande. Men det får man næppe lov at opleve på Sølyst.

Den japanske kunstner ankom til Sølyst den 1. marts. Og på en måde er hans ophold i Jyderup en afspejling af hans kunst, der kun giver et omrids af

virkeligheden. For her er alt nyt og fremmed for kunstneren.

En dag hældte han den netop indkøbte kærnemælk i sin te. Han troede han havde købt almindelig mælk, nu lignede det youghurt.

- Hver dag, når jeg handler i Jyderup, må jeg gætte mig frem mellem varerne. Nogle ting kan jeg godt forstå. Når der for eksempel står 2 procent salt på varer, siger Yasuaki Onishi.

- Først nu er jeg ved at lære, hvad en krone er værd. I supermarkedet betaler jeg bare med mit kreditkort. Men jeg kan allerede nu se, at der er meget dyrere her end i Japan, siger han.

Til gengæld har kunstneren benyttet sig af muligheden for gratis cykelture i omegnen af Jyderup.

- Jeg kan godt lide naturen i Danmark, især himlen, der hele tiden forandrer sig, siger Yasuaki Onishi, der på en tur nåede helt ud til kysten.

Dansk taler han ikke, og det engelske er ikke så veludviklet.

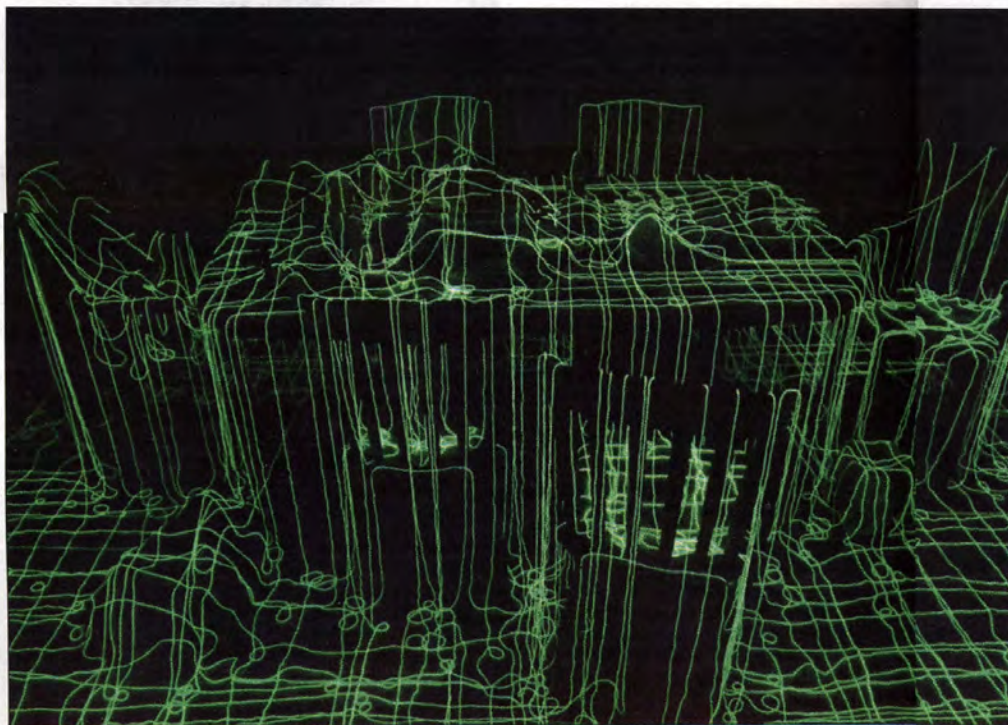
- Jeg taler ikke så meget med folk i Jyderup. De bliver vist også lidt forbavset over mit asiatiske udseende. Men på mine cykelture har jeg da talt med dem, jeg mødte. Mest om vejret, og om jeg var på rette vej, siger den smilende japaner, der undrer sig over, at man kan møde danskere, der drikker øl midt på dagen.

msc@nordvest.dk

AF MIKKEL SCHOU

- I min kunst antyder jeg et omrids af virkeligheden. Betragterens fantasi skal udfordres. Mange af mine installationer er i rolig bevægelse, som et symbol på bevægelserne i naturen og samfundet, siger den 29-årige kunstner Yasuaki Onishi.

Kunstneren opholder sig på Sølyst i Jyderup i marts og april, hvor han skal arbejde med sin kunst og til sidst fremvise en installation. Han er født i Osaka i



Her har kunstneren lavet et fotografisk eksperiment ved at lægge kemisk behandlet uldtråde, der lyser i mørke, over et spisestuemøblement. Foto: Yasuaki Onishi



# Multikunstner søger deltagere til Jyderup-projekt

## Jyderup

Den amerikanske kunstner Lexa Walsh søger borgere fra Jyderup til projekt, der skal fortælle en personlig historie om byen. Hun leder også efter musikere og folk, der kan synge, til at lave en jingle til Jyderup.

AF MIKKEL SCHOU

Det er noget af en multikunstner, der er kommet fra USA til Sølyst i Jyderup. Hun blev færdiguddannet i Californien i 1990 i keramisk skulptur.

- Jeg har ikke rørt keramik siden, men lavet skulpturer af andre materialer, siger den 40-årige kunstner Lexa Walsh, der er den yngste af en søskendeflok på 15.

Hun er kunstner, men beskriver sig selv som en slags arkæolog, historiker, beskuer og kulturambassadør. Og det er i den egenskab, at Jyderup kan stifte bekendtskab med hende.

- Jeg prøver at finde en kulturs historie ved at høre folks historier om deres lokalområde. Det minder om antropologi. Det skal ende med en installation af foto, lyde og genstande fra området. I dette tilfælde Jyderup, siger hun.

Lexa Walsh har tidligere lavet det samme projekt i mindre bysamfund i Serbien, USA og Taiwan. Borger-

ne kommer til hende med en genstand, som de har gemt, og som minder dem om deres by. De fortæller historien om genstanden og dens betydning foran et kamera, og det kommer til at indgå i en samlet udstilling fra den 25. april.

### Borgerne må selv melde sig

- Jeg har sat plakater op i Jyderup, for at folk skal komme til mig med deres historie, siger Lexa Walsh.

Interesserede kan henvende sig på Sølyst eller kontakte kunstneren gennem hjemmesiden [www.lexawalsh.com](http://www.lexawalsh.com). Og de skal ikke vente for længe, for kunstneren skal være færdig inden den 25. april.

Lexa Walsh har i sine tidligere projekter lavet postkort med de mennesker, hun har mødt. De er et alternativ til de traditionelle postkort af historiske personer og steder. De skal i stedet minde om de mennesker, der lever et sted.

- Jeg oplever mig selv som en opdagelsesrejsende. Den afsluttende installation er som en fremvisning af, hvad jeg fandt i et ukendt land, siger hun.

Men Lexa Walsh forlanger mere af borgerne i Jyderup.

- Jeg prøver også at finde folk, der kan lave en Jyderup-jingle. Et lille stykke musik, der kan repræsentere Jyderup. Man behøver ikke at være musiker, hvis bare man kan synge lidt, siger hun.

De musikudøvende vil nå at kunne mødes to gange, og nysgerrige kan henvende sig ligesom ved ovennævnte projekt.

- Orkestret er også en mulighed for, at folk fra Jyderup kan møde nogen, som de ikke kender i forvejen, siger Lexa Walsh.

[mso@nordvest.dk](mailto:mso@nordvest.dk)

Den japanske kunstner har været i Jyderup i en måned. Her har han givet sig hen til de kulturelle forskelle og det nordiske lys. Foto: Peter Andersen



## Virkeligheden tager sin tid

### Jyderup

Den japanske kunstner Yasuaki Onishi åbner i morgen eftermiddag sin udstilling på Sølyst i Jyderup. Det handler om tid og forskellige virkeligheder.

AF MIKKEL SCHOU

I morgen fra klokken 17 til 19 vil der blive serveret forskellig slags sushi og japansk brændevin i et af Sølysts mange lokaler i Jyderup. Det sker, når den japanske kunstner Yasuaki

Onishi åbner sin udstilling »Daily Distance«.

- I Japan bor jeg med mine forældre. Her på Sølyst er min dagligdag anderledes. Jeg har mere tid til min kunst, siger Yasuaki Onishi, der har været i Jyderup i en måned.

- Min udstilling handler om hverdagens ting. Man får en oplevelse af tid, når tingene i min installation går fra at være skjulte til at være synlige, siger han.

I det hele taget håber kunstneren, at udstillingen, der består af arbejder, der er udført på Sølyst, vil vække beskuerens fantasi.

Avisen har tidligere beskrevet den japanske kunstners besvær med at handle i Jyderup, fordi han ikke kender sproget. Det er en af grundene til, at emballage indgår i udstillingen. Det er resterne af de

ting, Yasuaki Onishi har spist og drukket uden på forhånd at være sikker på, hvad det var, han havde købt. Men en anden grund er hans syn på dansk design:

- Dansk design er interessant, siger han og viser en mælkekarton frem.

- Det er som kunst.

Bænkene på Jyderup Station er også faldet i kunstnerens smag. Dem finder han meget nordiske. Også det nordiske lys finder Yasuaki Onishi interessant. Derfor har man kunnet møde ham, når han vandrede Skarriksø rundt eller cyklede til Kalundborg og Havnø.

»Daily Distance« er efter morgendagens fernisering åben torsdag til lørdag fra klokken 14 til 17 frem til den 18. april.

[mso@nordvest.dk](mailto:mso@nordvest.dk)



Den amerikanske kunstner Lexa Walsh håber, at borgerne i Jyderup har tillid, mod og nysgerrighed nok til at deltage i hendes projekt.



# 太郎賞に大西康明さん

## 第10回岡本太郎現代芸術賞

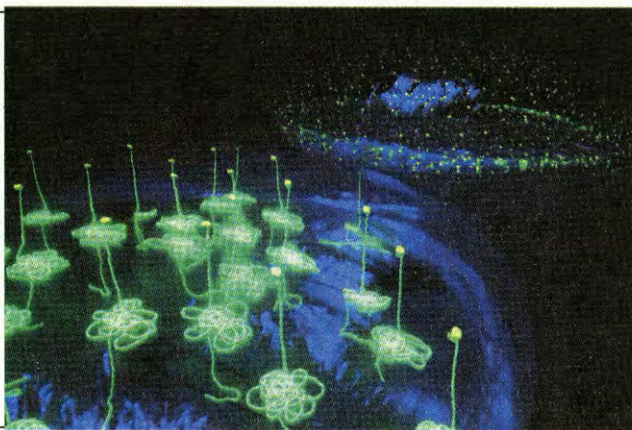
川崎市岡本太郎美術館（多摩区）などが主催する第10回岡本太郎現代芸術賞（TAR O賞）で、十六の個人・団体の作家による作品が入選し、太郎賞には大西康明さんの「restriction sight」が選ばれた。三

日から、同美術館で入選作を紹介する同賞展が始まる。同賞は一九九七年、「時代を創造する者は誰か」と、問い掛けた故岡本太郎氏の創作精神を受け継ぎ、自由な発想で現代社会にメッセージを発信する作家を顕彰するため創

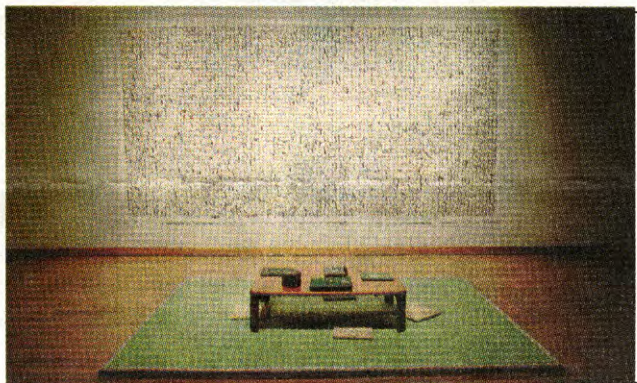
設された。今回、節目となる十回となるのを機にリニューアルし、ジャンルを超えた新たな芸術表現の発表の場として再スタートさせた。これまでの大賞などに代わって、太郎賞や、太郎を支えて二〇〇五年に亡くなった養女岡本敏

八日まで。授賞式は二十六日に同美術館で開かれる。作品展は四月（飯田克志）

岡本太郎賞の大西康明さんの作品



岡本敏子賞の菱刈俊作さんの作品



特別賞の角文平さんと田中雄一郎さんの作品



東京新聞 2007/2/2

### 「ポリ袋」がみせる生命のうごめき

おおいし やすあき 大西 康明さん (28) 現代美術家



大学院まで彫刻を学んだ。母校の大阪市立工業高校で非常勤講師をしながら制作を続ける。5年前は金属の彫刻作品を作っていた。ポリ袋の作品に変わったのは、「作り続ける」ためだという。「アトリエは大阪の実家の居間なので、金属の彫刻を作るのは難しい。居間で制作できるものにしてこの形になった。今も作れることに幸せを感じているし、これからも作り続けたい」

入選作16点を展示した「第10回岡本太郎現代芸術賞展」は、川崎市岡本太郎美術館（同市多摩区枋形の生田緑地内）で4月8日まで。（西田健作）

「restriction sight」は、暗い部屋に置かれた二つの立体作品だ。二つともポリエチレンの袋で、ファンから送り込まれる空気での背丈より大きくなったり、地面にはいつくばるほど小さくなったりする。表面に蛍光色の丸いシールが張られたり、内部にも蛍光色の糸が垂らされたりして、クラゲのようにも、細胞膜のようにも見える。審査委員の山下裕二さんは「簡単な構造なのに美しく、生命の原始的なうごめきを感じさせられた」とたたえた。

受賞作の「restriction sight」は、暗い部屋に置かれた二つの立体作品だ。二つともポリエチレンの袋で、ファンから送り込まれる空気での背丈より大きくなったり、地面にはいつくばるほど小さくなったりする。表面に蛍光色の丸いシールが張られたり、内部にも蛍光色の糸が垂らされたりして、クラゲのようにも、細胞膜のようにも見える。審査委員の山下裕二さんは「簡単な構造なのに美しく、生命の原始的なうごめきを感じさせられた」とたたえた。

2月26日にあった授賞式で「こんな立派な賞をいただいて、うれしくもあり、こっぴどいような気持ちもあります。（使っているのは）ただの袋とシールと糸など、たったそれだけなので……」とほかに。受賞作の「restriction sight」は、暗い部屋に置かれた二つの立体作品だ。二つともポリエチレンの袋で、ファンから送り込まれる空気での背丈より大きくなったり、地面にはいつくばるほど小さくなったりする。表面に蛍光色の丸いシールが張られたり、内部にも蛍光色の糸が垂らされたりして、クラゲのようにも、細胞膜のようにも見える。審査委員の山下裕二さんは「簡単な構造なのに美しく、生命の原始的なうごめきを感じさせられた」とたたえた。



川崎市多摩区で

朝日新聞 2007/3/1



# アート進行形

5

京都市立芸術大学大学院修了の新進美術家、大西康明（1979—）  
 大阪府富田林市在住が、第10回岡本太郎現代芸術賞展で岡本太郎賞に輝いた。同賞は川崎市岡本太郎美術館が、「芸術は爆発だ！」のコピーで一般にも広く知られた故岡本太郎の芸術精神を継承し、自由な視点と発想で、現代社会に鋭いメッセージを突きつける作家を奨励するために創設された。今回は過去最高の614点の応募があり、16人ユニットが入選、榎木野衣や山下裕二ら5人の選考審査の結果、トップ賞に選ばれた。過

## 見る者を引きつけるスケール感

去9回では最高賞は出ておらず、今回の大西が初の受賞となった。「正直本当にうれししい、自信になりました。美術のことは知らない田舎の祖母も岡本太郎の名前はよく知っているので受賞を喜んでくれました。別に受賞しなくても創作は続けるつもりでしたが、こんなに向けてハラをくれる状況になりました」と素直に喜ぶ。その受賞作は、岡本太郎美術館川崎市多摩区枳形で4月8日まで開催中の同展で、見る者を静かにひきつけるスケール感とおもしろさを漂わせている。暗幕で仕

て内部の何本もの黄色のヒモが、とぐろを巻いたような状態からうねうね伸び上がり、原始生命の誕生の神秘のような光景を演出する。ふたつの大きな袋が風船のようにゆっくりふくらみ、次には次第にへたっていく光景の繰り返し、見る者を飽かせない。3年ほど前からつくり始めた連作のなかでスケールや完成度の高い作品で、見事グランプリを獲得した。

大阪の出身。幼少のころから工作好きで、高校から美術系へ。筑波大学で彫塑を専攻、アカデミックな教育を受けたあと、京都芸大大学院へ。自由放任の空気のなか「なぜ作品をつくるのか」を自問自答する創作の洗礼を受けた。金属板を木の幹に巻き付け、木を燃やして中を空洞にして、内側と外側の関係を提示した作品。暗闇の中で見つめることを行為の痕跡として残す写真作品などを経て、受賞作のシリーズが始まった。

こんどの受賞の特典として今秋には、東京・青山の岡本太郎記念館で作品発表する機会があたえられる。イタリア在住で国際的に活躍する画家、高橋秀とパートナーの藤田桜が日本の新進作家を海外にばたかせるために創設した「秀桜基金留学賞」の第1回受賞者に選ばれたなど、この春は受賞の朗報が続いた。

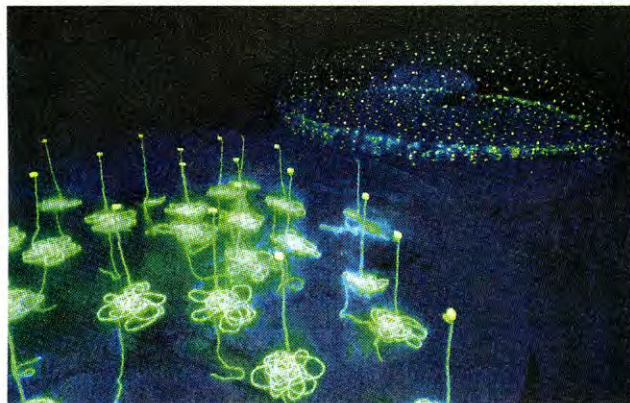


「工作少年のようにわくわくくりながら遊んでいたんですよ」と話す大西康明さん（京都市東山区・スフェラビル）

岡本太郎賞を受賞した新鋭美術家

大西康明さん

切られた空間はブラックライトだけの闇が広がる。ビニールの巨大な袋状造形二つが、すこしずつふくらみ、いっばいの大きさになるとこんどはしぼんでいく。一つは直径3・5センチ、奥行き5センチの巨大な袋が横向きになった形、表面にはブラックライトで黄色の無数のドットが浮かび、重層する星雲の宇宙が収縮と拡張をゆっくり繰り返すようなコスミックな気配。もう一方はゆっくり円筒形を立てたようにふくらみ、その動きにつれ



岡本太郎賞を受賞した大西康明の「restriction sight」（500×1000×500センチ）＝第10回岡本太郎現代芸術賞展での展示（岡本太郎美術館）

「岡本太郎記念館での発表はプランがおもしろくなければキャンセルです。でも、ぼくはぎりぎり追いつめられて答えをみつけたときの方が喜びが大きい」  
 工作少年のときの初々しい創作の喜びを大切に持ち続ける大西の夢が着実にふくらむ。文中・敬称略  
 （編集委員・太田垣実）